



7月8日(日)

ツォゴウとMと私の3人は、UB(ウランバートル)から空路ホブドに向かった。ツォゴウもこの3月まで東京の大学に留学していた。機内はナーダム休暇を故郷で過ごす帰省客で満席。9:40ホブド着(所要時間3時間)。UBとホブドの時差は1時間。モンゴルは東西に長い国なので、国内でも西と東では2時間の時差がある。

空港で私たちを迎えてくれたのは県知事(ツォゴウの父)の公用車の運転手で、車はトヨタのランドクルーザー。因みにナンバープレート0001は知事の手、0002は副知事、0003は…、と役職順に運転手付の公用車が決められているという。その0001の車で、空港から市内に向かった。ほんのちょっとしたボランティアと軽い気持ちで来てしまったけど、私たちってそんな待遇をもらっていいのかしら…? それとも、この国は家族も公用車を使えるの…?

私たちがボランティアをするところは、市の中心に程近い病院の一角にあった。一戸建て平屋の障がい者通所施設で、センターとよばれていた。入口でにこやかに迎えてくれたのは、「障がい者親の会」の人たち4人。きょうは日曜日なので、施設の利用者はいない。

事務室に通されて、自己紹介の後、ボランティアの期間や内容などについての話し合いを、ツォゴウの通訳で行った。日本語も英語もここではまったく通じない。彼らは母国語のモンゴル語以外は、ロシア語なら分かるようだ。

明日からの4日間はナーダム休暇で、実際に“仕事”をするのは13日(金)からで、日曜

を除く5日間の午前中ということになった。私たちの主な“仕事”は、利用者とその保護者に個々に会って、話を聞いて、助言すること……。私が思っていたボランティアとはだいぶ違うようだ。“学校に通えない障がい者達(子供ばかりでなく大人もいる)が家に閉じこもったままにならないよう、毎日ここに通ってきて、一緒に過ごして、遊んだり、作業したりするのを、私たちがちょっとだけお手伝いする”くらいに軽く考えていた。「親の会」代表のバイヤーは、利用者名簿のようなものを開いて、1日目はこの人とこの人というように、毎日5～6人ずつの割振りをしているようだ。だんだん気が重くなってきた。

打ち合わせの後、事務室のとなりの部屋に案内された。そこは普段は職員室として使っていて、主に学習面を指導する職員がひとりいるのだが、今は産休中。机と本棚と戸棚が一個ずつ壁につけて置いてある。そこが今夜からの私たちの寝室だ。部屋の中央の床に、セミダブルサイズの真新しい厚いマットレスが2枚敷かれて、寝具が用意されてあった。

時刻は12:00を過ぎていた。みんなで食事



聖なる岩山の麓での前夜祭

に出かけた。県庁近くのボヤントホテルのレストランで昼食をとった。そこへ、ツォゴウが連絡したのか、彼女の両親も食事にやって来た。ツォゴウの卒業式で来日した父親とは、3月に東京で会っているが、母親とは初対面だ。

昼食後は「親の会」の人たちとは別れて、県政府主催の馬頭琴演奏者の会に出席した。馬頭琴の演奏が聴けるわけではなく、ツォゴウの父親をはじめ、壇上にずらりと並んだ関係者が次々と演説し、それを通訳がロシア語にし、客席に座っていて呼名された人は、立ち上がってそれに答える。私たちも自分の名前を呼ばれたときに同じように立ち上がってお辞儀をした。ツォゴウが言うには、私たちは馬頭琴の研究に来蒙した日本人、と紹介されたそうだ。

壇上の人たちの話はとにかく長い。客席には100人以上の馬頭琴関係者が座っている。全員を紹介するとすると、あと1時間では終わるまい…。途中でそっと会場を抜け出し宿舎に戻った。

夕食も「親の会」の人たちと食べ、会の誰かが用意してくれた車でナーダムの前夜祭を見にでかけた。会場は市内から車で30分くらいのところにあるモンゴル文字が刻まれた聖なる岩山の麓だ。この山は普段は登山禁止だ。蚊もたくさんいるので虫よけスプレー、夜は冷えるのでセーターも必携だ。

太陽が沈んで、8時を過ぎる頃、山頂に設えた点火台に麓から火の点いた矢が放たれ、それを合図に前夜祭が始まった。主催者側の長い演説や大統領からの手紙の代読に続いて、馬頭琴、打楽器、ホーミー、オルティンドー、踊りなどすべて終わったのは11時過ぎだった。宿舎に帰ったのは午前零時近かった。

今夜から夜はMと私のふたりだけ。入口の鍵は



広場でイベントを待つ人たち。後ろは県庁舎

「親の会」の人が持って帰ってしまう。中からは開けられるが、締め出されると入れない。

ウランバトルでの4日間がのんびりしていたからか、盛りだくさんのきょう一日はとても長く感じられた。

7月9日(月)

冷蔵庫には、昨日のうちに「親の会」の人がパン・ヨーグルト・牛乳・果物などを用意してくれていたのので、朝食はそれで済ませた。9時過ぎに「親の会」の3人が迎えに来てくれた。昨日迎えてくれた人と違う人もいる。おそらく交替できょう一日私たちに付き合ってくれるのだろう。ツォゴウは用事があって、午前中は来られないという。さあ、困った、通訳がない、どうする？ Mのモンゴル語と“指さしモンゴル語”の本が頼りだ。

1日目のナーダムイベント会場は歩いて5分ほどの県庁舎前の広場だ。9時スタートの予定だったが、舞台設置やマイク準備などに時間がかかっているようで、いっこうに始まる気配がない。これがモンゴルでは普通のように、観客はのんびりと歓談しながら、待ち時間を楽しんでいる。民族衣装のデールを着ている人もたくさん見受けられた。

実際に始まったのは11時過ぎだった。出し物は前夜祭と同じで、馬頭琴・歌・踊りなどを間近で

見ることができた。2時半過ぎに午前中のプログラムが終わった。遅い昼食後、「親の会」の人たちに、ザハ(市場)に連れて行ってもらった。そこで午前中の用事を済ませたツォゴウと落ち合った。

このザハは入口で入場料を払う。中は細い路地が入り組んでいて、両側には店がぎっしり並んでいる。人・人・人ですれ違いもできないほど混雑している。迷子になったらどうしよう…。私たちはここで肉・野菜・果物・米・乳製品などの食料を買った。昨日からずっと、「親の会」の人たちに食事の世話になってきたが、ツォゴウを通して話をきいてみると、その費用は「親の会」から出ているらしく、ホブド県や市の補助はないようだ。センターには台所もあるのだから、明日からは自分たちで食事をつくろうと、Mと話し合って買い物をしてセンターに帰った。「親の会」が電気鍋と電気釜を用意してくれた。

夜は文化宮で開かれたコンサートに出かけた。政府主催のものらしいが、ツォゴウの父親の関係者ということで首から掛けたプラスチックケース入りの“入場許可証”を見せると入場可。馬頭琴・ホーミー・オルティンドーなどを聴き、その後、誘われるままにパーティにも参加した。汚れたジーンズ・Tシャツからワンピースに着替えておいてよかった。ここでも、名前を呼ばれて、賞状のようなものまでいただいてしまった。私たちはここではどのように紹介されたのか、ツォゴウに尋ねるのを忘れた。きょうもセンターに戻ったのは零時ごろだった。

7月10日(火)

ナーダム2日目。ツォゴウが民族衣装のデールを着てみないかと、彼女の母親のデールを2着

持ってきてくれた。きょうはツォゴウもデールを着用している。私はモスグリーンのデールを着せてもらった。デールはゆったりしたロングドレスで、ウエストに帯を巻きつけて、丈を調節する。首のところをきっちりとめるので、そこだけは窮屈に感じる。デールを着た3人は、きょうも0001の公用車で、モンゴル相撲会場のスタジアムに向かった。ここでも首から掛けた入場許可証で正面の特別席で観戦することができた。

相撲にはあまり興味が無いが、力士の服装と勝者の所作は興味深かった。前見頃の無い長袖の上着、短いパンツ、先が反りかえったブーツ、真ん中が塔のようにとんがった帽子を身に着ける。勝者は敗者のお尻を軽く1回平手で叩き、その後、鳥の羽ばたきのように両手を広げて舞う。体の大きな力士が子供のようなそんな動きをするのがおもしろい。

午後はツォゴウ家のサマーハウスに連れて行ってもらった。ホブド郊外のボヤント川支流の畔のゲルだ。ゲルに行く途中で、車は川を渡る。ランドクルーザーでない車だったら、かなり遠回りしなければならないだろう。そこでツォゴウの弟のジェンコに会うのも今回の旅の楽しみ(目的)のひとつだ。

ジェンコは13歳、彼は幼少時に脳性まひに罹っている。夏休みはホブドで過ごしているが、普段はUBにいて、特別支援学校に通学している。母子と父は、夏以外は、UBとホブドに別れて生活している。特別支援学校は、UB以外は、モンゴルにはまだつくられていないようだ。ホブド県知事のジェンコの父が、障がい者施設に力を入れて、応援するのも納得できる。ジェンコについては、また機会があれば書きたい。(次号に続く)